

「^まいろいろの間 -里山のくらしと自然とのつながりを考える-」

太田 道人

2階展示室には、家の^{ひとま}一間や山菜、まき、炭、わらで作られたものなど、ものすごく人の影響が感じられる展示コーナーがあります。ここには、今から50年ほど前の里山に住んでいた人々が、自然の中でとてもうまく生活してきた様子が語られています。そのうまさは、科学的にも根拠のあるすぐれたものでした。



図1：いろいろの間で 子ども達を集めて道具の話しをする筆者。手に持っているのは‘火吹き竹’。生活の中にひそむ科学性に気づいてほしい。

1. いろいろの間は学習の場

「この竹の筒は、いろいろのまきに火をつける時につかうもので、“火吹き竹” っていうんだよ。まきにマッチの火をいきなりくっつけても、絶対に火はつかないので、まずは“すんば” というスギの枯れ枝に火をつける。スギの葉、だから“すんば” ね。すんばを手を持って木に近づけながら、こうやって火吹き竹から、ふう〜と息を送ると、すんばは炎をあげて燃え上がって、炎が木に燃えうつるんだ。スギの枝は細く分かれています上に油も含んでいるから、すごく燃えやすい。この性質と燃えているものに風を当てると火の勢いが増す性質とをうまく利用してるんだね。ただ！ この時にすんばから出る煙のひどいことといったらもう、部屋の隅が見通せないほどで。ごほっ、ごほっ（笑）。

これは、2階「とやま空間のたび」展示室の一角に設けられた“いろいろの間（ま）”で行われている展示ガイドの一コマです。いろいろの間は、「丘陵と平野」



図2：まきに火をつけている様子（左）と火付けに使うすんば（右）。火のついたすんばを手を持って、これに火吹き竹で息を吹きかけると、すぐに赤い炎があがります。



図3：煙でかすんでいる室内。いろいろのまきからは、こんなにもたくさんの煙が出ます。この煙は茅葺き屋根を防虫し、屋根の骨組みをしぼっている縄を丈夫にする効果があります（撮影協力・五箇山の民宿「勇助」）。

の展示の中で、雑木林の生き物、山菜、田んぼのイネ、生活の道具などと一体となって作り込まれています。お客さんには一段高くなった板の間に履き物を脱いで上がっていただいて、いろいろや自在かぎ、ひあま、天然素材でできた家や道具の展示を見ていただけるようになっています。また、「トミ子おばあちゃんの思い出話」と題した5つの音声ドラマは、昔の日常生活の一コマを、臨場感たっぷりに聞くことができます（次の項で述べます）。

いろいろの間から展示室を見渡すと、今見てきた山菜、炭、まき、山の動物・植物、そして田んぼ、脱穀機が



図4：いろいろの間から見た展示室の様子。右手に山菜や燃料、材木をとることのできる雑木林を、左手に米とわらをとることのできる田んぼを配して家が自然と接していたことを象徴的に展示しています。

目に入ります。そう、このいろいろの間は、生活していくためになくてはならない自然と田んぼに囲まれているようにレイアウトされているのです。

昔の里山で暮らしていた人々には自然のものをうまく利用して生きていく知恵がありました。

5月にあの沢の斜面に太くてうまいゼンマイが出る。株から何本も出ているゼンマイは、来年のために2・3本残して採集する。ゆでて日に当てて干して手でもんで、ようやく乾燥ゼンマイができあがる。肉になる動物はどこにいて、どうやってつかまえてどう料理すればいいか。ざる、かご、ぞうり、なわ、みの、かんじきの材料となる竹と木とわらははどこに生えていて、どうやって作るのか。そういった細かな知識と技術、経験が体にしみついていました。

学芸員の話はさらに続きます。

「炭を見たことがありますか？ パーベキューで使ったことあるよね。茶道のお茶席でも使われてるね。炭はまきに比べると煙が少ししか出ないし、一定の火力で長く燃えるから町の家では喜ばれたんだよ。こわれないようにそっと持ってごらん。すごく軽いね。炭は何から出来ているかな？ 『木』だねー。今度は生の木



図5：里山から採れる山菜や魚貝類の展示



図6：道具の展示。自然からものを採ってくるために、道具と体を使います。

を持ってごらん。炭よりだいぶ重いでしょ。炭は、空気を遮断したまま生の木を強く熱してつくります。これが蒸し焼き。すると、不要な成分と水分がガスになって木から抜けて黒い炭素だけが残るのです。生の木を炭にすると重さはたったの5分の1に、体積は2分の1になるんだよ。炭は軽いからこそ、山の中からはるばる里まで運び出すことができたんだね」

服や金属の道具を買うため、あるいは、子どもの勉強のためなどにはお金が必要でしたので、炭を町まで売りに行きました。また、かいこを大量に育ててまゆをつくらせ、これを出荷していました。まゆからは生糸（きいと）を取り出して絹織物（シルク）を作ることができました。



図7：左：炭と生木の重さを比べている。
右：炭焼の様子。炭焼き釜から出る煙をたえずチェックして、焼け具合を知ります。

ちょっと大きめに作られているいろいろの間では、学芸員やボランティアが、時々お客さんを集めて昔の道具に触っていただきながら、自然をうまく利用した生活の知恵とそこにひそむ科学性に気づいていただけるよう活動しています（表紙写真）。

2. トミ子おばあちゃんの思い出話（富山弁語り）

いろいろの間には、「トミ子おばあちゃんの思い出話」と題した短い音声ドラマが5話用意されています。トミ子おばあちゃんは、山すその家に生まれ、子どもの頃はおじいさんやおばあさんが働く様子を見たり手伝っ



図8：養蚕の様子。白いものはカイコの幼虫。右はまゆ。

たりして育ちました。

だから里山の自然の中で生活する術が身についています。

家に馬がいたり、かいこであふれかえっていたりと、昔の里山の生活は現代のものとは

かなり異なっていますが、日々変化する自然を常に見つめながら生活していた様子、自然をうまく利用した知恵の一部を感じていただけたと思います。分かりやすく、しかも富山弁で語ってくれます。

トミ子おばあちゃんの思い出話

- 山田家の紹介
- 山田家の間取り
- 第一話 初めての山菜採り
- 第二話 おじいちゃんの炭焼き
- 第三話 家はカイコでいっぱい
- 第四話 いちりで雑炊づくり
- 第五話 働きものの馬

このマークがある場所を離ってください。

図9：操作用PCの画面

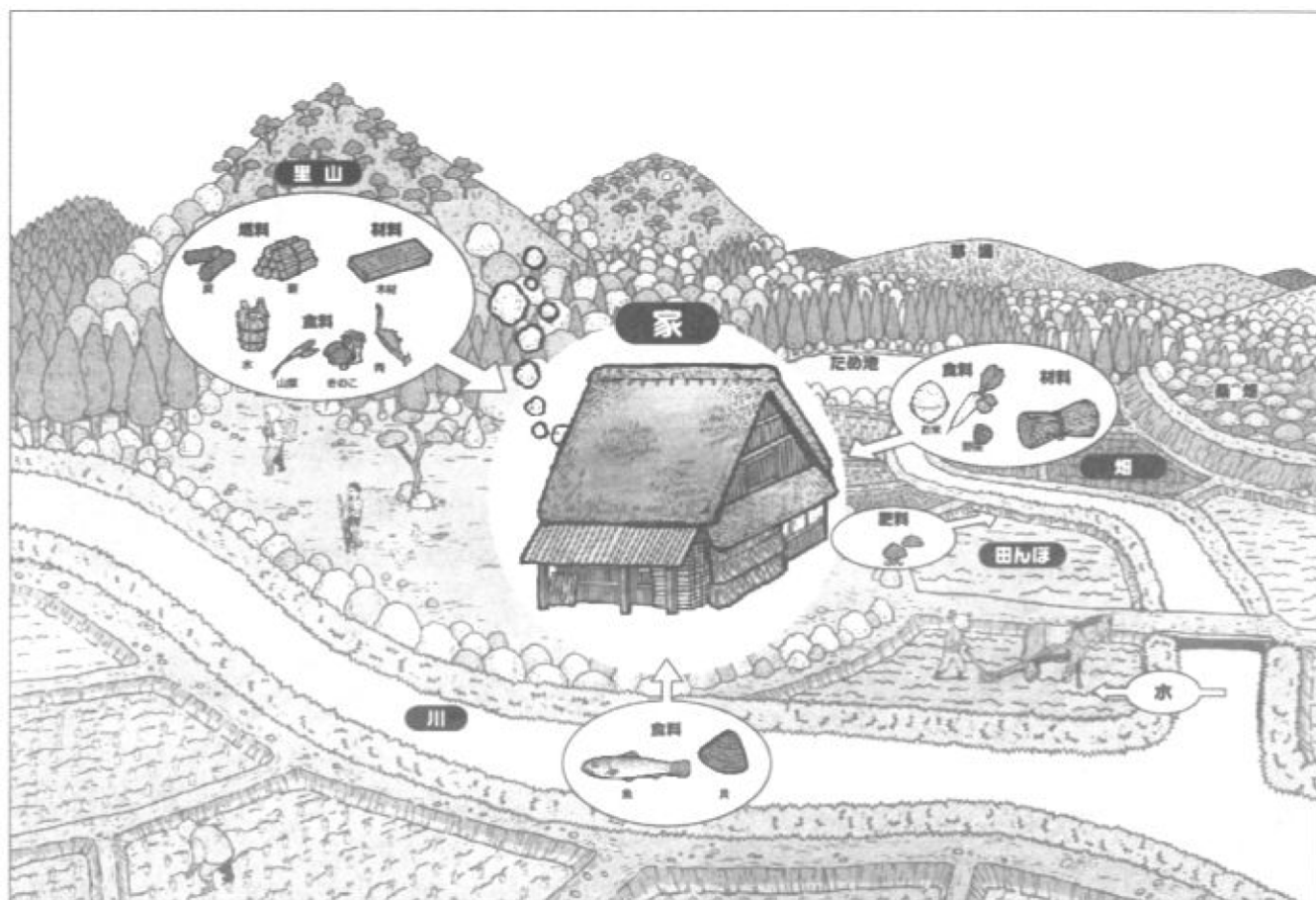


図10：里山の生活と自然とのつながり

3. 里山のくらしと自然とのつながりを図で表すと

図10は、里山の生活とその周りの自然との結びつきをシンプルにまとめて説明したものです。里山があれば、毎日の大切な燃料となるまきや木材のほか、山菜や貴重なたんぱく源となる動物を手に入れることができます。川があれば、魚や貝をとることができますし、田んぼに水を入れることができます。田畑からは、主食の米をはじめ野菜、道具を作ることのできるわらをとることができます。茅場があれば、屋根のふきかえに必要なススキをとることができます。

人の生活が近くの自然と密接につながっていることで成り立っている様子がわかります。

4. 田んぼのイネは、わらとしても利用した

米を採るために田んぼで栽培されたイネは、とことん利用されつくします。

「さて、もみを落としたイネの茎は“わら”。これがまた使い物になるんですよ。昔の人は茎を木づちで軽くたたいてしなやかにしたものを上手に編んで、みの、ぞうり、わらじ、袋、縄、むしろなどを作りました。すごい技術を持っていたものです。余ったわらは、田んぼの肥やしとしてまいて、その養分を再びイネに吸収させました。米を取るためだけにイネを作るのではなく、頭を使って手を使って、わらまでもとことん利用する。質素ではあるけれど、今で言うリサイクルは、昔はあたりまえに行われていたんだね。」

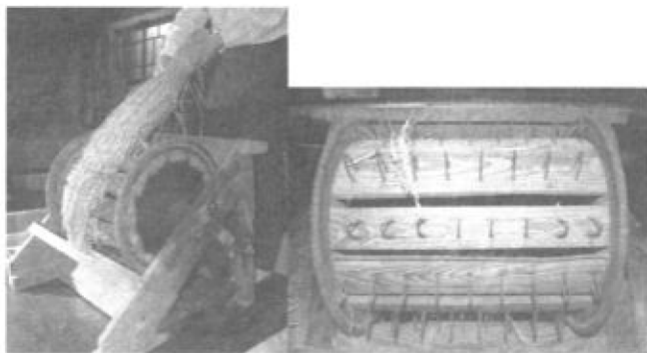


図11：足踏み脱穀機。上下の針金は少しずつずらしてつけられています。



図12：わらで作られたもの。左から縄、ふかぐつ、わらじ。

フロアーには、古くさい足踏み脱穀機がでんと置いてあります（図11）。足踏み脱穀機は、イネから食料としての米を取り出すと同時に、^{せん い そ ざ い}繊維素材としてのわらも生み出してくれるすぐれものです。直径40センチほどのドラムの表面には、山型に曲げた針金が左右5センチ間隔、上下10センチ間隔で刺してあります。ペダルを踏んでドラムを速く回転させ、束ねたイネの根元を手にとって穂の部分を針金に当てると、もみがばちばちとたたき落とされるという仕組みです。針金の配置をさらによく見ると、上下の針金は5センチの3分の1ずつ横にずらしてつけてあるので、穂先にまんべんなく当たるよう工夫されていることが分かります。この回転式脱穀の仕組みは、今から80年程前の大正時代のものであるにもかかわらず、なんと現在でもコンバインの中で使われ続けています。

5. 20年たてば元どおりになる！ 里山の暮らしを支えてきた強力な森の再生力

山が人々の生活のために、炭やまきを提供する場所としてよく利用されていた時代、いわゆる「里山の時代」には、山の木は大きく育つ前に切られていたため、背丈はそれほど高くなりませんでした。日本はどこで



図13：山の林を少しずつ使い回している様子。

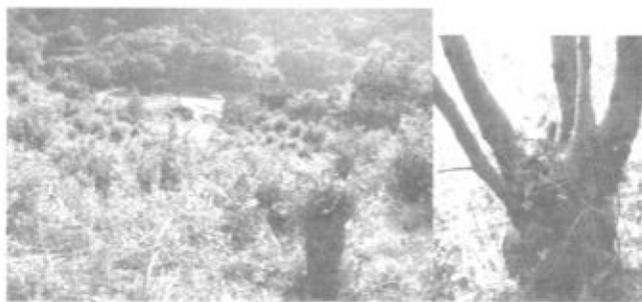


図14：炭をとるために木を切っても、木はすぐに枝を伸ばしてきます。左は切って1年後のクヌギ。右は約8年後のもの。（現在も炭を生産している兵庫県川西市一庫地区にて。富山ではもうこのような様子を見ることはできなくなっていました。）

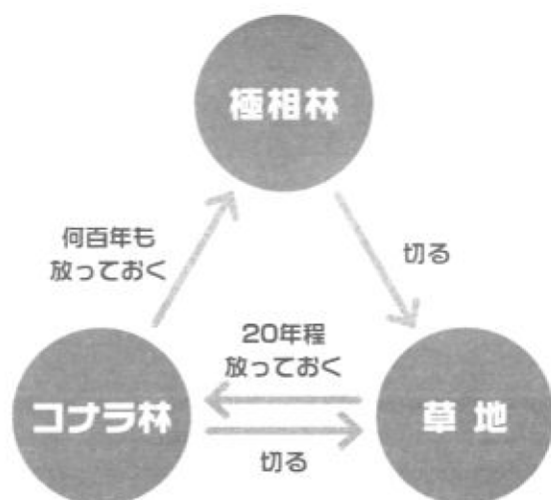


図15：人手の加わり方と林の様子との関係

も雨がたくさん降るので、木が切られても数年も経つと、林が復活してきます（図14）。木は若いうちに切られると特に、切り口から新しい枝を勢いよく出す性質があります。人々は、木を切った場所を10年～20年放っておくだけで、自然に大きくなる林で何度も木を切ることができました。

図15には、現在、山にたくさん生えているコナラ林が、林のゆっくりとした変化の中で、どの位置にあるのかを示してあります。図中の“極相林”とは、その土地に古来からあったもの、または、その土地に今ある林を、何百年も放っておくとたどり着くと考えられる林の姿です。富山の標高の低い山であれば普通、スダジイという照葉樹林が極相林の状態ですが、今はほとんど全て切られてしまって、ごくわずかしが残っていません。

昔の里山の林では、コナラ林が頻繁に切られては放っておかれることをくり返していたわけですから、図15の草地とコナラ林との間を行き来している状態であったといえます。

20年たてば元の森にもどる！ この強力な森の再生力があったからこそ、里山の暮らしが何百年もの間とぎれることなく続いてきたといえるでしょう。

6. 林はこれからどうなるの？

山が里山として使われなくなってから、すでに50年近くもたってしまいました。人に切られることから解放されたことで、一本一本の木が大きく育ち、大きな

林の中の空間にたくさんの樹木が生える自然林の様相に変わりつつあります。図15のコナラ林が極相林に近づいている段階にあたります。やがては、林の中に照葉樹林を作るスダジイやウラジログシ、アカガシなどが芽生えてくることでしょう。

炭やまきといったエネルギーおよび、山菜、肉といった産物を人にとられなくなったことで、今は山に蓄えが増えています。それは山にすむ多くの生き物たちに使われ、またリサイクルされて、彼らが世代をくり返していく環境となって、ゆっくりと確実に引き継がれていきます。

展示室の隅には、かつては里山として働いていたコナラ林が、もしそのままにされれば、長い間にやがてたどりつくであろう森の姿、あるいは、大昔にここにあった原始の森の象徴としてスダジイの大木が1本展示してあります。



図16：富山の丘陵の極相林の代表種としてスダジイの大木を展示しました。

何世代にもわたって里山の自然の中で暮らしてきた人々は、自然からものを取り出しながらも、その自然がなくならないようにしてきたことが分かりました。生活にどうしても必要な物を限られた素材から創り出すためには、常に自然の様子を見ながら、知識と共に経験と勘を働かせることが必要だったことでしょう。

自然の中で生きていくために必要だった勘。長らく都市生活を続けてきた私たちの体からは、すでにその勘は失われているかもしれません。しかし、現在の私たちもまた自然がなければ生きていけないことを考えると、自然を注意深く観察し、自然の中に身を置く機会を少しでも多く持って、わずかでも勘を取り戻しておきたいものです。